2021 年度グローバル・スタディーズ研究科研究助成金　報告書

課題名：現代ペルシャ湾岸地域におけるエスニック集団のアイデンティティに関する基礎研究
助成期間：2021 年 4 月から 8 月まで

グローバル・スタディーズ研究科
地域研究専攻博士後期課程
松田和人

1.　はじめに

受給者は上智大学大学院グローバル・スタディーズ研究科による「2021 年度グローバル・スタディーズ研究科研究助成金」をいただき、「現代ペルシャ湾岸地域におけるエスニック集団のアイデンティティに関する基礎研究」を題とする研究を実施した。なお、本研究助成金の助成期間に関して、当初は 2021 年度の 1 年間の予定であったが、受給者が 2021 年 8 月からカタールへの研究留学に伴い本学を休学した関係で自動的に受給資格を失ったことから、最終的な助成期間は 2021 年 4 月から 8 月までとなった。ここでは、左記期間中に実施した本研究について、研究背景、目的、結果、研究会での報告に分けて報告することとしたい。

2.　本研究の背景

1.1 先行研究の特徴

ペルシャ湾岸地域（以下、「湾岸地域」）の政治に関する近年の先行研究の特徴として、現地の政治的動静をイスラーム教のスンナ派／シーア派の二項対立として捉える宗派還元主義的な分析観点が挙げられる（Hashemi & Postel, 2017）。中でも、バーレーンは人口少数派の「スンナ派」エリート層が支配王族ハリーファ家を中心に政治権力を独占し、人口多数派の「シーア派」を抑圧しているという単純な二項対立の図式で捉えられることが多い（例：Matthiesen, 2013）。

1.2 宗派還元主義的分析観点の問題点

そうした宗派還元主義的な分析観点の問題点は、現代湾岸地域に存在するエスニック集団にあまり注目しない点である。実際、バーレーンでは湾岸アラブ諸国の中で最も古くからエスニック集団を単位とした動員が行われてきた（AlShehabi, 2019）にも拘らず、宗派還元主義的な分析観点では、スンナ派ハリーファ家政権及び例えばフワラ（Huwala）の様なスンナ派エスニック集団は全て「スンナ派」として分析上均質化されることが多い（例：Matthiesen, 2013）。

1.3 本研究の着想経緯

「スンナ派」内にもエスニック集団を含む多様な社会集団が存在し、また彼らの関係も多様であると考えられるため、必ずしも彼らを「スンナ派」として分析上均質化することは妥当ではないのではないか。例えば、バーレーンのフワラに関する先行研究によると、ともにスンナ派でありながらハリーファ家政権とフワラとの政治的・社会的関係は歴史的に決して一枚岩ではなかったことが明らかにされている（AlShehabi, 2019）。従って、宗派内の特定のエスニック集団に注目し、まずは彼らのアイデンティティに関する理解を深めた上で、彼らのハリーファ家政権との政治・社会的関係を考察することで、単純な宗派還元主義に陥らずに現代湾岸地域の複雑な社会集団関係の一部を明らかにできるのではないか。そこ

で、受給者は研究の第一歩として、現地の政治情勢を考慮してシーア派よりもより調査に伴う政治的リスクの低いスンナ派のエスニック集団の中から比較的先行研究が存在するフワラに着目し、エスニック集団としてのフワラのアイデンティティを理解することを目的とする本研究の着想に至った。

3. 本研究の目的

本研究の目的はエスニック集団としてのフワラのアイデンティティを文献研究及び聞き取り調査をとおして理解することであった。

4. 研究結果

この度いただいた研究助成金を活用し、2021 年 4 月から 8 月の期間、以下のとおり文献調査及び聞き取り調査を実施した。

4.1 文献研究

フワラのエスニック・アイデンティティに関する文献（例：Al-Dailami, 2014; Floor, 2014）を対象にした文献研究を実施した。なお、文献研究の実施にあたっては本研究助成金で購入した文献を活用させていただいた。文献研究の結果、フワラのアイデンティティに関して主に以下の点が判明した。

（1）歴史的にフワラのアイデンティティの特徴としてはアラブ人、スンナ派、歴史的（特に 20 世紀前半まで）にペルシャ湾の両岸を往来していたことが挙げられる（AlShehabi, 2019; Fuccaro, 2009; Potter, 2009）。

（2）（1）が歴史的なフワラのアイデンティティの特徴であるが、1950 年代までに湾岸地域でアラブ主義が活発になり、アラブ諸国側においてペルシャ人的なバックグラウンドを持つことが好ましくなくなると、それまでアジャムを自称していたスンナ派のペルシャ語話者たちがフワラを名乗るようになったため、歴史的なフワラのアイデンティティの境界線と現在のフワラのアイデンティティの境界線は異なっている（Al-Dailami, 2014）。

（3）フワラと一口に言っても、その中には姓を基とする複数の集団が存在し、時に互いが政治・経済的に競争し合ってきた（Floor, 2014）。

上記の結果は、今後フワラを研究対象として分析を進める上で、示唆に富むものであった。

4.2 聞き取り調査（オンライン）

現在バーレーンに在住するフワラの人物（1 名）を対象に半構造的及び質的な聞き取り調査を 1 回実施した。なお、新型コロナウイルスの感染拡大に伴う渡航制限の関係で実際にバーレーンに赴くことは叶わなかったため、聞き取り調査はオンラインで実施し、その際に本研究助成金で購入させていただいた機器及びノートを活用した。

聞き取り調査では、少なくとも現在バーレーンに在住するフワラのアイデンティティの境界線は比較的可変的であり、今やペルシャ系の住人もフワラを名乗る場合があることが判明した。加えて、部族と同様、フワラの人々の中にも姓を基にする複数の集団があり、中には互いに対立関係にある集団もあるため、ハリーファ家政権とフワラとの政治的関係を調査するにあたってフワラを分析上一括り扱うには注意を要することも判明した。この様に、聞き取り調査によるこれらの結果は、文献研究の調査結果とも大きく重なる部分が多かった。

なお、受給者はスノーボール・サンプリング形式で今後の聞き取り調査対象を拡大していく計画であったため、今回の調査対象者に依頼をしたところ、家族を含む他のフワラの人々を紹介してもえるとのご回答をいただくことができた。さらに、今回の調査対象者からフワラに関するアラビア語の歴史書をご紹介いただいたため、受給者の言語能力の許す範囲で今後の研究に活用したい。

5. 研究会での報告

本研究の途中経過の報告を下記研究会にて合計 2 回実施した。

(1)現代中東社会研究会 第二回研究会（2021 年 6 月）

発表題：現代ペルシャ湾岸地域におけるエスニシティ

(2)現代中東社会研究会 第三回研究会（2021 年 7 月）

発表題：現代ペルシャ湾岸地域における政権とエスニック集団との関係：バーレーンのハリーファ家及びフワラの事例

6. おわりに

本研究は、上智大学大学院グローバル・スタディーズ研究科による本研究助成金に加え、指導教員である澤江史子先生及び岩崎えり奈先生のご指導及び本研究助成金の事務手続きをご担当いただいたグローバル・スタディーズ研究科事務室の佐能様をはじめとする多くの関係者の方々のお陰で実施することができた。この場をお借りして、厚く御礼申し上げたい。